

理工系専門分野で PI (Principal Investigator) として研究室を率い、教育研究をリードする立場になり、10 年が経とうとしている。私の所属組織には約 290 名の理工系研究者がいるが、女性で自らの研究室を率いる者は 10 名にも満たない。数少ない女性 PI として貢献が求められる場面も増え、将来を託す若手研究者や学生を指導しつつ、専門分野の先端的研究を開拓し続けなければならない孤独感や計り知れない重責にさいなまれることもある。しかし、理工系の良さは、そうしたあらゆる苦悩も喜びも、若手研究者や学生と分かち合える点にある。研究者が単独で研究を遂行することが多い文科系と異なり、研究室で長い時間を多くのメンバーと過ごす理工系の研究室の人間関係は、「家族」にも似ている。助け合い、成功も失敗も、良いことも悪いことも分かち合い、教え、教えられ、切磋琢磨する環境の中で、PI となった自分は女性であることの強さと優しさ、気配りも発揮したい。自分との出会いによって、多くの若手がキャリアの過程に生じる困難を乗り越える糧を得られればよい。この 10 年で、多くの学生や研究者が自分の研究室から旅立ち、社会を支える技術者や研究者として活躍の場を得ている。それが自分の役割の確認につながり、誇りにもなりつつある。

私がここに至るまでに会った、大切な人生の先輩をふたり、紹介したい。ひとりは、今は亡き実父である。父は大学で数学を志し、卒業後、当時米国から日本に導入され始めた電子計算機の仕事に従事し、一貫して多くの計算機技術者を育て続けた。父の書斎にはいつも、コーディングシート、使い古したパンチカードやプリンタの出力用紙があった。ある日、子供だった私は父に連れられて、最先端の実用技術を紹介するビジネスショーと呼ばれる展示会に出掛けた。大規模で華やかなコンベンション会場で、大型のラインプリンタから次々に出力される動物や花束の絵柄が印字された紙をもらった。これが、多様な仕事を自在にこなす計算機への関心の一歩となった。その後、学生時代に私が初めて手にすることになる PC を買ってくれたのも、父だった。

もうひとりは、博士論文の指導教官である。先生は分散人工知能分野で卓越した業績を持ち、招待講演で世界を飛び回り、斬新なコンセプトで研究の最前線をリードし続けていた。しかしその一方で、日々の研究には決して妥協しない姿勢を貫き、どこまでも自分に厳しい人だった。輝かしい業績の裏で大量の地味な実験に黙々と取り組み続ける研究室の日常は、優れた研究成果がどのように産み出されるのかを学ぶのに十分すぎるものだった。この先生に出会わなければ、私は今の仕事をしていないだろうし、今のキャリアもなかった。

学位取得後、PI という立場になり初めて、先生が抱えていたであろう、あらゆる事柄を理解するに至った。PI になれば、責任者として様々な課題に直面することになる。月並みではあるが、女性として結婚、育児や介護など、家庭と研究の仕事との両立の悩みも然りである。研究者や技術者は往々にして真面目で責任感が強く、自分だけで頑張ろうとする。しかし、所詮ひとりの力は限られている。独りで悩まず、他力本願を決め込み、開き直す勇気が必要である。幸いにも、理工系は「家族」同然の研究室やプロジェクト単位で遂行される研究が多い。研究を介して出会い、そこに参加する誰もが、苦労も喜びも共有できる存在となるだろう。子育て世代で自宅を離れることができない若手研究者でも、臆せず研究しよう。子育てが一段落したシニア世代の研究者であれば、その苦労は十分すぎるほど理解している。逆に、シニア世代の研究者が介護で家庭を空けられない時期を迎えることもある。シニア世代は若手に支えられることを是とし、任せる勇気も必要である。

ところで、私の専門分野は分散人工知能である。分散環境での問題解決のための手法開発が専門であり、これは私が理想とする社会の実現にも通じている。分散環境において、多様性は優れた性能の発揮に欠かせない。多様な計算主体がそれぞれの特性を活かし、良質な問題解決を導くのである。多様性という点に着目すれば、女性の理工系分野での活躍こそ、理工系の研究環境の改善や問題解決につながるに違いない。理工系でマイノリティともいえる女性 PI となった自分が、今度は、人生のよい出会いの担い手となろう。自分の人生の先輩がそうであったように、次世代の研究者や技術者達を力強く導きたい。共に研究し、彼らのキャリアを支え、時には支えられる立場となりながらも歩み続けることが、自分の役割であり次世代への貢献と考えている。